

# 長期・滞在型海外研修の実際：ハーバード大学 イェンチン図書館実地研修

江上 敏 哲

**抄録：**筆者は2007年3月から1年間、ハーバード大学イェンチン図書館に滞在し、実地研修を行なった。日本古典籍の目録出版や整理、ミーティングや図書館集会への出席、各地の図書館訪問や調査等を行ない、成果をウェブでリアルタイムに報告した。長期・滞在型海外図書館研修の利点として、アウトプットやコミュニケーションの体験、学内者として得られる情報・サービス、背景やマイナス面の理解等がある。また課題として、キャリアパスとの連動性、報告の公開、情報共有による研修事業の定着等がある。

**キーワード：**海外研修、長期研修、ハーバード大学イェンチン図書館

## はじめに

筆者は2007年3月から1年間、当時在籍していた京都大学附属図書館からの派遣で、ハーバード大学イェンチン図書館に実地研修のため滞在した。本稿では、長期・滞在型であった本研修がどのように企画されたか、どのように実施されていったか等、その実際について報告する。また、近年の長期・滞在型の海外研修を概観しつつ、自身の経験を踏まえ、そのあり方や利点・課題について考える。

なお、現地で得られた最新情報や図書館事情等については、研修中、京都大学図書館機構ウェブサイトにて「ハーバード日記」<sup>1)</sup>と題して随時報告してきた。本稿と併せてお読みいただければ幸いである。

## 1. ハーバード大学とその図書館

本論に先立ち、ハーバード大学とその図書館について概説する。

ハーバード大学はボストンに隣接したケンブリッジ市にある。アメリカ最古の大学であり、開学は1636年。学生約20,000人のうち、学部生約7,000人、院生等約13,000人<sup>2)</sup>。院生の約3割が米国外からの留学生である。教員約2,300人（+医学・病院約10,000人）。職員数は約12,500FTEで、うちアカデミックスタッフが約1,300人である。

学内には大小80以上の図書館・図書室があり、全学で約1,600万冊の書籍を持つ。図書館に関わる職員は約1,200FTE。年間資料購入額は約3,000万ドルに及ぶ。これら全館が部局・分野の枠を超えて“Harvard University Library”（HUL）<sup>3)</sup>を構成している。Directorのもと、各図書館・図書室のほか、全体業務をカバーする事務局・プロジェクト等が組織される。Weissman Preservation Center（古典籍専門の保存部署）、Harvard Depository（郊外保存

書庫の管理組織）、Harvard-Google Project（Google Library Projectを担当）等。

さらにHULの中に、“Harvard College Library”（HCL）<sup>4)</sup>という13の図書館等からなるグループがある。後述するWidener Library, Lamont Library, 筆者の研修先であるHarvard-Yenching Library（以下HYL）等が属するが、Law Library, Baker Business Library等は属さない。トップのライブラリアン（Librarian）のもと、業務の各面で連携をとる。Technical Service（整理業務の集約）、Imaging Service（資料の撮影）や、広報・人事等の部署がある。

ハーバードの旗艦図書館であるWidener Library<sup>5)</sup>は、1915年開館。人文・社会系を中心に約640万冊の書籍を抱える。英語ほかの西洋諸語・スラブ・中東等、その言語数は100を超える。主要な言語・地域ごとに専門の蔵書構築ライブラリアンが配置され、資料を収集している。レファレンス・研究支援の部署、利用・貸出部署のほか、書庫内整理を専門に担当する部署もある。

学部生向けの学習用図書館であるLamont Library<sup>6)</sup>は、1949年開館。蔵書数は約18万冊。学部生のカリキュラムをサポートするため、資料を適宜廃棄しつつ蔵書を新鮮に保っている。コースリザーブ、ラップトップPC貸出サービスのほか、平日24時間開館（2005年秋から）、館内カフェ（2006年秋）等、学生に人気の学習場所である。

筆者が滞在したHYL<sup>7)</sup>は、Harvard-Yenching Institute内の図書館として1928年に設立された、東アジア研究図書館である。蔵書数は約120万冊で、うち中国語約70万冊、日本語約30万冊。北米では議会図書館、UCバークレーに次ぐ規模である。職員数は約40人で、各言語のサブジェクトライブラ

リアン、カタログガー、e-resource 専門ライブラリアン等がある。また、この図書館で開発されたイェンチン分類は、中国語・日本語資料整理のための分類法である。欧米の東アジア研究図書館で幅広く採用されてきたが、現在は、HYL 自身をはじめ LC 分類を採用するところが多い。



写真：Harvard-Yenching Institute

## 2. 本研修の概要と実際

### 2.1 企画と準備

本研修は、HYL によるヴィジティングライブラリアン (visiting librarian) 受け入れ事業である。これ以前より中国からライブラリアンを受け入れるという事業が継続されていたが、日本からの受け入れは今回が初めての試みである。3 年限定のパイロットプロジェクトとして、年 1 名ずつを受け入れ、2006 年は東京大学から森恭子氏<sup>8)</sup>、2007 年は京都大学から筆者、そして 2008 年は慶應義塾から角家永氏がこの研修を受けている。

研修者は J-1 ビザ (エクステンジビュイター (exchange visitor)) を取得し、Reischauer Institute of Japanese Studies のヴィジティングフェロー (visiting fellow) としてハーバード大学に在籍する。その上で HYL に滞在し、日本分野ライブラリアンの監督のもとに活動する。

京都大学では本研修の実施に先立ち、学内の図書系職員を対象に志望者の募集が行なわれた。「平成 19 年度図書系職員海外調査研修」という名称のもと、「大学図書館の業務・管理運営に関する調査・研修及び交流」による人材育成が目的として示されている。また研修内容としては「図書館業務実地体験」「特定テーマに関する実務研修、調査等」「(ALA 等の) 会議出席、米国大学図書館訪問調査」「ネットワーク作り」等が示されている。志望者は「志望理由書」を英語で、「研修計画書」を日本語で提出することが求められた。2006 年 9 月に募集開始、12 月に面接が行なわれ、研修者が決定した。

研修期間は、2007 年 3 月 20 日から 2008 年 3 月 19

日まで。この間、筆者は京都大学附属図書館に在籍し、海外出張という扱いであった。研修中は京都大学側が給与を支払う。ハーバード大学側は Reischauer Institute が 10,000 ドルを交通費・奨学金として支給する。これには日米往復旅費、図書館集会 (CEAL・ALA) 出席や各地図書館訪問のための費用等が含まれる。滞米中の住居費・生活費・保険料等については、自己負担である。

なお、滞米中の住居はハーバード大学によって用意されるというわけではなく、個人でアパートを契約した。また、ソーシャルセキュリティナンバーの取得、銀行口座の開設といった生活上の手続きも、自ら手配した。

### 2.2 研修環境と身辺

研修期間中はハーバード大学の一員として、身分証が発行され、職員番号が付与された。この身分証・職員番号が図書館利用の ID として兼用されるほか、コピー機やカフェでの支払い用アカウントにもなる。ウェブサービス用パスワードも発行され、職員ポータルや給与システムにログインできる。また、学内 LAN へのアクセス権を取得することで、キャンパス内どこからでもラップトップ PC でネット接続が可能となった。ウェブサービス用パスワードを使えば、認証システムを通して、自宅等の学外からも学内 LAN に入ることができる。

HCL には所属の図書館職員向けの内部ウェブサイトがあり、そこへのアクセスも許可された。また、ハーバード大学には職員・教員向けの情報共有ウェブサイトを多数あり、図書館業務に関するものも少なくない。それらへのアクセスの許可/不許可はサイトごとにそれぞれ設定されており、筆者がアクセスできるものもあれば、できないものもあった。さらに、メールアカウントの取得により、図書館職員向け内部メーリングリストに加入し、多くのカレントな情報を入手できた。学内のほとんどの図書館が ExLibris 社の Aleph を業務システムとして導入しており、この個人用 ID も発行された。

HYL ではその一員としてディレクトリに名前と肩書き (ヴィジティングフェロー (visiting fellow)) が記載された。HYL 内では Japanese Acquisitions and Reference Section に属し、その事務スペースの一角に席が設けられた。なおこのセクションは、日本研究のサブジェクトライブラリアン (蔵書構築とレファレンスを行なう) 1 人と、実務を補佐するスタッフ 2 人とから成る。ここで、後述するプロジェクトや業務補助に携わったほか、毎月の全館ミーティングに参加する等した。

本研修の募集時に、研修内容として「図書館業務実地体験」が示されていたが、これについては、ハーバード大学やHYL側で何かしらのプログラムが組まれていたわけではない。渡米後、研修者とHYL側とで相談の上、随時方針を決めていった。その際には、HYL側のニーズだけでなく、研修者の適性や経歴、研修者が帰国後に活かせる経験となるかどうか、十分に斟酌された。

### 2.3 古典籍補遺目録出版プロジェクト

実務研修のひとつとして、HYLにおける日本古典籍の補遺目録出版プロジェクトに、研修期間全体を通して携わった。

HYLには約14,000冊の日本古典籍がある。そのほとんどは貴重書室に収められ、HOLLIS<sup>9)</sup> (ハーバード大学のOPAC)での検索が可能である。また1994年には冊子体目録として『ハーバード燕京図書館和書目録』<sup>10)</sup>も刊行されている。この冊子体目録に収録されていない資料、未整理のものや刊行後に受入されたもの等約1,000冊について、補遺目録の作成がプロジェクトとして進行していた。その出版が具体化しつつあった時期に、筆者の滞在がスタートし、当プロジェクトの実務を任されることになった。

実際の書誌調査及び執筆は、国文学研究資料館の鈴木淳教授らによる。鈴木教授は2004年から数回に渡りHYLを訪れ、対象資料の書誌調査と、日本古典籍全蔵書の概要調査を行っていた。また出版については、日本の八木書店が行なう契約が交わされていた。筆者は、この日本側の研究者や編集担当者への現地からのサポートを担った。

HYLには日本古典籍の取扱いを専門としているライブラリアンはおらず、補遺目録出版は数年来の懸案事項だった。筆者は、京都大学電子図書館における貴重資料画像事業や、NACSIS-CAT和漢古書コーディングマニュアル作成に携わった経験があり、研修者の経歴とHYL側のニーズとが合致したかたちとなった。結果的に、研修期間中の多くの時間をこのプロジェクトに充てることになった。

以下はその具体的な実務内容の一部である。

#### ・資料現物の整理

書庫の一角に未整理のまま仮置きされていた資料個々に、連番を付与し、リスト化する等の整理を行なった。

#### ・書誌調査のサポート

筆者滞在中にも2度、鈴木教授らが来訪調査を行なった。調査をスムーズに進めるため、現物の準備、

当日のサポート、後日の代理調査のほか、過去の調査結果の整理等も行なった。

#### ・研究者・出版社とのやりとり

当プロジェクトでは、補遺目録そのものだけでなく、HYLの日本古典籍全般に関する寄稿論文を数人の研究者が執筆し、掲載することになっていた。これらを含む当プロジェクト全般にわたって、ディスカッションやデータ・文書の送受を、研究者や編集担当者との間で頻繁に行なった。

#### ・ローマ字化とエンチン分類付与

書誌や索引に付記する書名・人名ヨミのローマ字化を行なった。また、HYLでは古典籍に限り現在でもエンチン分類を採用しているため、未整理だった資料にエンチン分類による請求記号を付与していった。

#### ・論文図版用の写真撮影

論文に挿入する計130点ほどの図版のため、写真撮影を必要とした。HCLには図書館資料の撮影やデジタル変換等を専門に行なうImaging Serviceという部署があり、チーフライブラリアンやカメラマンと交渉しつつ、撮影等を依頼していった。対象資料の同定、撮影箇所の確定、指示、梱包・運搬等を、スケジュールを調整しつつ行なった。

内容・編纂方針の変更等の紆余曲折を経て、2008年6月に、『ハーバード燕京図書館の日本古典籍』<sup>11)</sup>として八木書店から出版された。

### 2.4 古典籍資料のカタログギング

出版プロジェクトとは別に、HOLLIS未収録の日本古典籍について、カタログギングの実務を行なった。これについては、諸事情から比較的短期間で終了した。

ハーバード大学図書館はOCLCの総合目録に参加している。OCLC Connexionと呼ばれる専用ソフトウェアを使って、書誌レコードを作成し、OCLCのデータベースに登録する。その後、ハーバードの図書館システムであるAlephによって、同じ書誌をハーバード大学のデータベースに登録し、所蔵レコードを作成する。

日本語資料の書誌レコードには、日本語・英語(ローマ字)両方の記述を併記することが求められる。また、対象となる資料は日本古典籍ではあるが、適用する目録規則はAACR2である。加えて、日本古典籍のカタログギングについては、CEALのCommittee on Japanese Materialsが作成した「Descriptive Cataloging Guidelines for Pre-Meiji Japanese Books」<sup>12)</sup>というガイドラインもある。さらには、

MARCフォーマットとそのルール，OCLC独自のルール，HYLのローカルルール等もそれぞれ一通り把握する必要があった。

## 2.5 勉強会・ミーティングへの出席

ハーバード大学では，学内の図書館職員を対象とした勉強会・講演や，行事，業務に関連するオープンなミーティングが数多く行なわれている。ハーバード大学図書館の一員としてこういったミーティング等に出席できるというのは，長期・滞在型研修ならではの貴重な体験である。内容そのものはもとより，様々な考え方を持つライブラリアンたちのディスカッションに触れたり，意見交換をして交流を深めたりと，大いに刺激を受けた。以下はその一部である。

### ・HCL Associate Librarian候補者による公開プレゼンテーション

HCLのAssociate Librarianの候補者（採用前・数人）が，図書館運営に対する自分の見解や戦略をアピールする公開プレゼンテーション。学内の図書館職員が自由に参加でき，評価等をコメントとして担当部署にフィードバックする。

### ・オープンアクセスに関するミーティング

ハーバード大学におけるオープンアクセスについての学内合意を得るに先立ち，提唱者である図書館長らがオープンなミーティングを開いて，ディスカッションを行なったもの。方針がトップダウンで決定されるのではなく，活発な議論が行なわれた。

### ・Task Group on Discovery and Metadata最終報告書についてのディスカッション

次世代OPAC等，カタログギングとその提供をいかに効果的に行なうかについて，タスクグループが作成した最終報告書<sup>13)</sup>に基づき，プレゼンテーションやディスカッションを行なった。

### ・HCL Librarianによるカフェパーティ

HCLトップのライブラリアン（Librarian）が学内のカフェに図書館職員を招待し，コーヒーとスナック類でくつろぎながら交流をはかるもの。Librarianらと意見交換する機会を得た。

## 2.6 図書館集会への参加

### ・CEAL（Council on East Asian Libraries）年次集会

毎年3月下旬～4月上旬にAAS（The Association for Asian Studies）年次集会とともに開催される。米国内の日中韓それぞれのライブラリアンや資料専門家が集まり，プレゼンテーションやディス

カッション，分科会，委員会等が行なわれる。2007年度は3月下旬にボストンで開催。

### ・NCC（The North American Coordinating Council on Japanese Library Resources）年次集会

CEAL年次集会にあわせて同時期に行なわれる。したがって，これも2007年度の開催は3月下旬，ボストン。米国での日本研究資料に関わる様々な活動について，各委員会やタスクグループからの報告がなされる。

NCCはこのほかにも，ワークショップや各委員会ミーティング等を随時行なっている。筆者もボストン美術館でのワークショップに参加したり，Image Use Protocol Task Forceのミーティングを傍聴したりすることができた。

### ・ALA（American Library Association）年次集会 全米から約3万人のライブラリアンが集まり，約400の講演・分科会・イベントや，企業による展示等が行なわれる。2007年度開催は6月下旬，ワシントンDC。



写真：ALA2007会場

## 2.7 大学図書館等の訪問

研修期間中，各地の大学図書館を訪問し，見学・調査を行なった。これについてもHYLやハーバード大学側が準備や手配を行なってくれるわけではない。企画・選定に始まり，担当者との交渉・調整，調査内容の設定，旅行自体の準備に至るまで，自ら手配し実施した。滞米中に訪問したのは9都市15ヶ所。以下はその一部である。

### ・University of Massachusetts Amherst

学生に人気のラーニングコモンズ<sup>14)</sup>を見学。また，日本研究の講義に参加し，学生とのディスカッションを体験した。

### ・University of Michigan

Google Library Projectの大学側の担当者に会い，学内全蔵書をスキャンする当プロジェクトの実際に

ついてディスカッションができた。

- ・ Ohio State University

マンガ専門の図書館を訪れ、日本のマンガを収集するに至った経緯や問題点等について話を聞いた。

- ・ OCLC

OCLCで20年以上にわたってCJKシステムの構築に携わってきたライブラリアンの方と、米国における日本語書誌の取扱いについてディスカッションする機会を得た。

当初の予定通りの調査にとどまらず、ときには先方からの思いがけない申し出で貴重な体験をすることもあった。何より大きな収穫だったのは、様々な専門・役割を持つ多くのライブラリアンに実際に会うだけでなく、お互いの立場から意見や情報を交換し、ディスカッションするという経験ができたことであった。

## 2.8 調査

このほか、ハーバード大学における図書館活動・運営の実際について、テーマを設定しつつ、調査を随時行なった。以下はその一部である。

- ・ Imaging Serviceと蔵書デジタル化体制

学内の資料デジタル化プロジェクトに対し、工程に応じた専門の部署・サービスによる支援体制がある。アドバイス等も行なっているImaging Serviceのチーフライブラリアンに話を聞き、支援体制が整っていることの意義等について、ディスカッションする機会を得た。

- ・ HCL Technical Services

Widener Libraryの資料受入・カタログニング、及び、HCL各館のカタログニングを集中処理する、テクニカルサービスの専門部署。実地見学と聞き取り調査を行なった。

- ・ HCL Library Collections Conservation Lab

貴重書でない貸出用図書について、修復・保存のための処置を施す工房。年間40,000冊の図書を処理する工房を見学し、作業や体制について話を聞いた。

渡米前にテーマを想定するなどしてはいたものの、実際に現地を訪れ、事情を把握していくにつれて、大幅な変更や調整を加えていくことになった。そうせざるを得ないことが長期・滞在型研修の難しさであるが、逆に、それが可能なことが利点であるとも言える。

## 2.9 「ハーバード日記」

以上のような見聞・調査によって知り得たことについては、随時まとめて、「ハーバード日記」<sup>15)</sup>と題して報告した。これは京都大学図書館機構のウェブサイトにて、2007年6月から2008年3月まで連載したものである。1年で記事数は43件に及んだ。

本研修のような海外研修では、従来、帰国後の報告がほとんどであった。が、現地で得られた最新情報・図書館事情を、記事にしてウェブで伝えることにより、時間をおかずにリアルタイムで報告ができる。また、研修の成果を当人のみに蓄積させるのではなく、図書系職員全員が体験できる研修へと転化させることができる。さらに、記事の公開によって、教員や学生、図書系以外の職員や市民にも、図書館活動や運営について広報することができる。以上のような効果を期待した活動であった。

この「ハーバード日記」では、Xoopsで構築された図書館機構ウェブサイト上に、wordpressを組み込み、一般のブログ同様のウェブページを形成する手法をとった。日本側での実務は、図書館機構広報委員会のウェブサイト小委員会が行なった。筆者が米国から投稿した記事は、広報委員会による査読を経て、数日中に公開された。

「日記」公開以降、初対面の方からコメントをいただいたり、ディスカッションの叩き台として取り上げていただく等、研修の効果が実感できたのは大きな収穫であった。但し、反省点も少なくない。当初、現地ライブラリアンと日本とのコメントのやりとりやディスカッションの場につなげられれば、と考えていたが、叶わなかった。また、投稿が不定期で、取り上げるトピックに計画性がなくなってしまった。さらには、アメリカの図書館活動・運営が抱えるマイナス面から学ぶことも多いはずではあるが、公開の場で率直には言及できず、プラス面しか書けない、という事情もあった。

## 3. 長期・滞在型研修のあり方

### 3.1 近年の長期・滞在型海外研修の事例概観

ここでは、近年に行なわれた長期・滞在型の海外研修の例を概観しておきたい。大学図書館職員を対象に、1ヶ月以上、海外の図書館等に滞在した研修で、過去5～6年のうちに実施されたものを対象とする。

ここ数年連続して実施されている例として、イリノイ大学モートンソンセンターのプログラム研修(Fall Associates Program / The Mortenson Center of International Library Programs, University of Illinois)<sup>16)</sup>がある。世界各国、10～20名の中堅ライ

ブラリアンを、8週間現地に滞在させ、プログラムを提供するもの。講義・見学だけでなく、ミーティング・ワークショップへの参加、ディスカッションやプレゼンテーションの体験、イベント等を通じた交流等が行なわれる。

国立大学図書館協会では、平成18年度以降毎年1名ずつ、このプログラム研修に図書館職員を派遣している。同協会人材委員会の海外派遣事業<sup>17)</sup>によるもので、「国際的な視点に立ったマネジメント能力を備えた人材の養成」を目的としている。プログラム参加費用と渡航費が支給され、帰国後『大学図書館研究』に投稿することが求められている。平成20年度までの3年間で、庄ゆかり氏（広島大学）、大塚志乃氏（大阪大学）、鳥谷和世氏（神戸大学）が研修者として採用されている<sup>18)</sup>。

私立大学図書館協会のほうは、平成15年度から、同プログラム研修への図書館職員の派遣を行なっている。同協会国際図書館協力委員会<sup>19)</sup>によるもので、「先進的な図書館サービス・運営」の学習と「国際的な人的交流」が目的とされている。プログラム参加費用と宿泊費等が協会から支給され、レポート提出と総会での報告が求められている。平成20年度までの6年間で、鷹尾道代氏（成城大学）、梅澤貴典氏（中央大学）、峯環氏（明治学院大学）、高井響氏（立命館大学）、伊藤秀弥氏（立教大学）、勢田玲生氏（健康科学大学）が研修者として採用されている<sup>20)</sup>。

慶應義塾大学メディアセンターは、2002年8月、トロント大学図書館と研修の交換協定を結んでいる。交流とスタッフの研鑽を目指したもので、日本から図書館職員が半年間派遣されているほか、トロント大学からもライブラリアンが来日し、2ヶ月間滞在している。村田優美子氏・岡本聖氏らが、実務体験、聴き取り調査、ミーティング参加等を行なったという報告<sup>21)</sup>がある。

トロント大学図書館への派遣の例として、片岡真氏（九州大学）<sup>22)</sup>の「Elsevier-sponsored International Librarian Residency」による研修がある。エルゼビア社がスポンサーとなった図書館員国際研修プログラムであり、2006年12月から3ヶ月間滞在している。本館でのIT・レファレンスに関する実務体験等。さらに翌2007年には、同じエルゼビア社のプログラムとして、久保山健氏（大阪大学）<sup>23)</sup>がピッツバーグ大学図書館に派遣されている。東アジア図書館に、2007年12月から3ヶ月間滞在している。

このほか、国立情報学研究所の平成18年度次世代学術コンテンツ基盤共同整備事業の一環として、

オーストラリアのクィーンズランド工科大学図書館に2006年8月末から6ヶ月滞在し、機関リポジトリアの実務を行なった星子奈美氏（九州大学）<sup>24)</sup>の例。学内職員を対象とした在外研修制度により、2005年6月から3ヶ月間、米国各地の大学図書館等を歴訪した土居純子氏（同志社大学）<sup>25)</sup>の例。2003年11月、平成15年度文部科学省国際研究交流担当職員短期海外研修プログラムとして、スウェーデンのヴェクショー大学図書館にゲストライブラリアンとして1ヶ月滞在し、実務体験を行なった上野恵氏（大阪教育大学）<sup>26)</sup>の例等がある。

### 3.2 長期・滞在型研修の利点と課題

本研修を通し、海外研修のあり方そのものについて、どういう意義があるか、どのように行なわれるべきか等、考えるきっかけとなった。筆者自身、短期での海外図書館訪問は何度か経験しているが、長期・滞在型の海外研修にはそれとは異なる特有の利点や課題がある。これについては、前項で紹介した他の研修者による報告・論文でもいくつか言及されている。以下、研修者の意見や自らの経験を踏まえつつ、私見ではあるが、長期・滞在型の海外研修のあり方やその利点・課題について考え、まとめにかえたい。

・アウトプットによる貢献、コミュニケーションという体験

研修者の意見で多く言及されていたのが、現地の情報入手できたという“インプット”の成果だけでなく、日本の事情をプレゼンテーション等で伝えたという“アウトプット”や、ミーティングや日々のディスカッションによって行なわれた“コミュニケーション”の持つ意義についてであった。お互いの立場から意見や情報を交換し、ディスカッションするという経験は非常に貴重なものである。パーティやイベント等、インフォーマルなコミュニケーションの場を多く持てるのも、長期・滞在型の研修ならではの利点である。また、プレゼンテーションやディスカッションによって、先方にも何かしら得るものがあってこそ、本当の意味での人的交流・ネットワーク作りが成し得るのではないかと。

・学内・館内の一員として行動・情報入手ができる  
長期・滞在型の研修では、その大学や図書館の一員として認められ、身分証やID・パスワードが与えられる。これによって得られるものの大きさは計り知れない。学内向けの勉強会やミーティングに入り込める。業務用メーリングリストやウェブサイ

トでカレントな情報に触れられる。学内に人脈を広げられる等。また、学内LANや図書館資料を利用できる利点も大きい。

・社会・文化・習俗等、背景にあるものを知る

図書館活動や運営は図書館それ単体でのみ成立しているわけではない。当然のことではあるが、短期間で図書館だけを訪問し、特定の調査を行なう限りでは、背景の十分な理解は難しい。学生の学習活動、コミュニケーションスタイル、労働環境、法律やセキュリティ、場合によっては風土や食生活に至るまで。日常生活・実務体験を通し、図書館活動・運営に影響を与えている社会・文化・習俗等の違いを知ることができる。

・マイナス面があること、そのまま導入できないことに気付く

大学の一員として滞在し、現地でディスカッションを重ねていくうちに、マイナス面も見えてくる。例えば、頻繁な異動のない人事制度に伴うデメリット等。米国図書館の活動や運営には見習うべき点が多いとはいえ、抱える課題や問題点も少なくない。これも、短期の研修やその報告・論文では言及されることが少ない。

また、社会・文化等の背景の違いを知ること、そのサービスや制度がたとえ先進的または専門的であったとしても、そのまま日本の大学図書館に適用できるわけではない、ということがわかる。数人の研修者が同様の見解を述べている。それらをどのように導入すべきかは、背景の違いやマイナス面を考慮しつつ、慎重に検討されなければならない。

・人事・キャリアパスとの連動性

現在、日本の大学図書館職員の多くが不確定な人事異動を受けている。専門分野・職種が定まらないだけでなく、帰国後の部署・担当業務が不明なままでは、研修の目的や効果を明確に意識し続けることが難しい。研修中・帰国後ともに機関リポジトリ業務を担当という例<sup>27)</sup>のように、長期研修の効果と帰国後の人事・キャリアパスとの連動性が、事前に考慮されるべきである。

・報告をオープンにリアルタイムで

筆者が「ハーバード日記」を企画した理由のひとつは、本研修を“個人”のものとして終わらせず、“全員”の研修へ転化させるべきである、ということにあった。従来の研修では、その概要や存在すら十分に周知されていない例や、報告が内部向けにと

どまる、あるいは成果が十分に共有されないという例もある。研修そのものへの理解や協力を得るためにも、不透明な部分をなくし、成果をオープンにするべきである。

特に長期・滞在型の場合は帰国を待たず、ウェブでリアルタイムに発信するほうが、より効果的である。実際、先に紹介した研修者の中にも、プライベートなメーリングリストやブログで現地の様子を日々報告していた例は、少なくないようである。このような活動がオフィシャルな場で展開されることを期待したい。

・研修事業定着のための情報共有と橋渡しの仕組み

本受け入れ事業にあたり、HYLのライブラリアンが何度か日本の大学図書館に足を運び、職員の派遣について個別交渉を行なった。その交渉にはかなりの時間がかかったように聞いている。Yale大学等、日本からのヴィジティングライブラリアン (visiting librarian) 派遣を望む具体的な声をいくつか耳にしたが、日本側の反応は中国・韓国等に比べると消極的とも言われる。その原因として、個別交渉の負担が大きいこと、かつ日米双方とも、過去の事例やノウハウの集約・共有が不足していることがあるのではないかと。一方で、モータンソンセンターのプログラム研修は、国立大学図書館協会・私立大学図書館協会ともに、数年分の蓄積が得られたことで、継続的な事業として定着しつつあるように見える。

財源や人員の確保が個々の大学の問題になるとしても、研修事業を単発かつ個別のままに終わらせず、ノウハウや効果・課題等を、大学間の枠を越えた場で集約・共有すること。それに基づいて、日米双方のニーズと障害を整理・把握し、研修事業をスムーズに橋渡しできるような、組織的な仕組み作りが必要なのではないか。

謝辞

研修期間中、またその前後にわたって、大勢の方からご指導・ご協力をいただきました。特に、マクヴェイ山田久仁子氏・James Cheng館長をはじめとするHarvard-Yenching Libraryの皆様、ハーバード大学及び米国各地のライブラリアンの皆様の、寛大なるご支援とご協力に深く感謝申し上げます。また、研修の機会をくださった京都大学附属図書館、ご理解くださった京都大学情報学研究科に感謝いたします。最後に、情報提供から精神的支援に至るまで、多くの励ましをくださった日米欧各地のみなさんに、あらためてお礼を申し上げます。

- 1) 江上敏哲. “ハーバード日記：司書が見たアメリカ”. 京都大学図書館機構. (オンライン), 入手先 <<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/word-press/>>, (参照2008-08-28).
- 2) 以下, 数値は下記を参照. Harvard University fact book 2007-08. The Office of Institutional Research, 2008. (online), available from <[http://www.provost.harvard.edu/institutional\\_research/FACT-BOOK\\_2007-08\\_FULL.pdf](http://www.provost.harvard.edu/institutional_research/FACT-BOOK_2007-08_FULL.pdf)>, (accessed 2008-08-28).
- 3) Harvard Libraries. (online), available from <<http://lib.harvard.edu/>>, (accessed 2008-08-28).
- 4) Harvard College Library. hcl.harvard.edu. (online), available from <<http://hcl.harvard.edu/>>, (accessed 2008-08-28).
- 5) Harvard College Library. “Widener Library”. hcl.harvard.edu. (online), available from <<http://hcl.harvard.edu/libraries/#widener>>, (accessed 2008-08-28).
- 6) Harvard College Library. “Lamont Library”. hcl.harvard.edu. (online), available from <<http://hcl.harvard.edu/libraries/#lamont>>, (accessed 2008-08-28).
- 7) Harvard College Library. “Harvard-Yenching Library”. hcl.harvard.edu. (online), available from <<http://hcl.harvard.edu/libraries/#hyl>>, (accessed 2008-08-28).
- 8) その報告として以下の文献がある. 森恭子. “ハーバード大学イェンチン図書館の実務研修は何を残したか”. 若きライブラリアンの海外大学図書館研修: Global Librarian Networkの形成を求めて: 平成19年度国立大学図書館協会シンポジウム実施要項. (オンライン), 入手先 <<http://www.library.osaka-u.ac.jp/sympo/mori.pdf>>, (参照2008-08-28).
- 9) HOLLIS Catalog. (オンライン), 入手先 <<http://hollis.harvard.edu/>>, (参照2008-08-28).
- 10) 岡雅彦, 青木利行編集. ハーバード燕京図書館和書目録. 東京, ゆまに書房, 1994, 413p, (書誌書目シリーズ, 36), (Harvard-Yenching library bibliographical series, 4). (4896687698)
- 11) 鈴木淳, マクヴェイ山田久仁子編著. ハーバード燕京図書館の日本古典籍. 東京, 八木書店, 2008, 284p, (Harvard-Yenching library bibliographical series, 13). (9784840696692)
- 12) Isamu Tsuchitani, etc. Descriptive cataloging guidelines for pre-Meiji Japanese books. revised Sept. 1, 2007. (online), available from <<http://www.eastasianlib.org/cjm/JRareBooksCatGuide.pdf>>, (accessed 2008-08-28).
- 13) Task Group on Discovery and Metadata. Final Report. 2007. (online), available from <[http://isites.harvard.edu/fs/docs/icb.topic117213.files/TGDM\\_final\\_report\\_Sept\\_07.pdf](http://isites.harvard.edu/fs/docs/icb.topic117213.files/TGDM_final_report_Sept_07.pdf)>, (accessed 2008-08-28).
- 14) このラーニングcommonsについては以下の文献で報告した. 江上敏哲. UMass Amherstのラーニング・commons. 大学の図書館. 27巻, 8号, 2008.8, p.164-165.
- 15) 前掲1) 参照.
- 16) Mortenson Center for International Library Programs. “Associates Program”. University Library, University of Illinois at Urbana-Champaign. (online), available from <<http://www.library.uiuc.edu/mortenson/associates/>>, (accessed 2008-08-28).
- 17) “海外派遣事業/海外派遣者選考委員会”. 国立大学図書館協会. (オンライン), 入手先 <<http://www.soc.nii.ac.jp/anul/j/operations/overseas/index.html>>, (参照2008-08-28).
- 18) その報告として以下の文献がある.  
庄ゆかり. イリノイ大学モートンソンセンター Fall 2006 Associates Program 参加報告. 大学図書館研究. No.80, 2007.8, p.108-120.  
庄ゆかり. “イリノイ大学モートンソンセンターで学んだマーケティングはどう活用できるか”. 若きライブラリアンの海外大学図書館研修: Global Librarian Networkの形成を求めて: 平成19年度国立大学図書館協会シンポジウム実施要項. (オンライン), 入手先 <<http://www.library.osaka-u.ac.jp/sympo/sho.pdf>>, (参照2008-08-28).  
大塚志乃. “イリノイ大学モートンソンセンター Associates Programに参加して”. 図書系職員勉強会 (仮称) ホームページ. (オンライン), 入手先 <<http://kulibrarians.hp.infoseek.co.jp/95th/95th.pdf>>, (参照2008-08-28).  
大塚志乃. イリノイ大学モートンソンセンター2007国際図書館員研修プログラムに参加して. 大阪大学図書館報. 41巻, 3号, 2008.3, p.10-11.
- 19) “国際図書館協力委員会”. 私立大学図書館協会. (オンライン), 入手先 <<http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/index.html>>, (参照2008-08-28).
- 20) その報告として以下の文献がある.  
鷹尾道代. “海外派遣研修の報告と今後の課題”. 私立大学図書館協会. (オンライン), 入手先 <[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken\\_report2003.html](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken_report2003.html)>, (参照2008-08-28).  
鷹尾道代. アメリカにおける大学図書館員の専門性について: イリノイ大学モートンソン・センター国際図書館プログラムに参加して. 大学図書館研究. No.71, 2004.8, p.17-32.  
梅澤貴典. “2004年度海外派遣研修報告書”. 私立大学図書館協会. (オンライン), 入手先 <[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken\\_report2004.html](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken_report2004.html)>, (参照2008-08-28).  
梅澤貴典. アメリカの大学図書館運営: モートンソンセンター国際図書館プログラム参加報告. 大学図



書館研究. No.74, 2005.8, p.40-54.

峯環. “2005年度海外派遣研修報告”. 私立大学図書館協会. (オンライン), 入手先 <[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken\\_report2005.pdf](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken_report2005.pdf)>, (参照2008-08-28).

峯環. アメリカの大学図書館における利用者サービスに学ぶ：イリノイ大学モーテンソン・センター国際図書館プログラムに参加して. 大学図書館研究. No.78, 2006.12, p.40-52.

高井響. “2006年度海外派遣研修報告書”. 私立大学図書館協会. (オンライン), 入手先 <[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken\\_report2006.pdf](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken_report2006.pdf)>, (参照2008-08-28).

伊藤秀弥. “2007年度海外派遣研修報告書”. 私立大学図書館協会. (オンライン), 入手先 <[http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken\\_report2007.pdf](http://www.jaspul.org/kokusai-cilc/haken_report2007.pdf)>, (参照2008-08-28).

21) その報告として以下の文献がある。

村田優美子. トロント大学での半年間. MediaNet. 11, 2004.10, p.62-63.

岡本聖. 交換研修トロント大学図書館へ. MediaNet. 12, 2005.10, p.75-77.

22) その報告として以下の文献がある。

Librarian residency promotes international collaboration. Library Connect Newsletter. Vol.5, No.2, 2007.4, p.10.

片岡真. “ユーザーの視点によるサービス構築：トロント大学図書館での経験”. 若きライブラリアンの海外大学図書館研修：Global Librarian Network

の形成を求めて：平成19年度国立大学図書館協会シンポジウム実施要項. (オンライン), 入手先 <<http://www.library.osaka-u.ac.jp/sympo/kataoka.pdf>>, (参照2008-08-28).

23) Takeshi Kuboyama. 10 weeks @ the University of Pittsburgh Libraries: Realizing the differences. Library Connect Newsletter. Vol.6, No.2, 2008.4, p.14.

24) その報告として以下の文献がある。

星子奈美. Queensland University of Technology (QUT) 研修報告. 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2006/2007, 2007.6, p.36-42.

星子奈美. “Queensland University of Technology (QUT) における機関リポジトリ業務の実際”. 若きライブラリアンの海外大学図書館研修：Global Librarian Network の形成を求めて：平成19年度国立大学図書館協会シンポジウム実施要項. (オンライン), 入手先 <<http://www.library.osaka-u.ac.jp/sympo/hoshiko.pdf>>, (参照2008-08-28).

25) 土居純子. Go ahead!!：在外研修で考えたこと：在外研修レポート. 同志社大学広報. No.377, 2005.11, p.19.

26) 上野恵. スウェーデン ヴェクショー大学図書館からのメッセージ. 大学図書館研究. No.71, 2004.8, p.33-40.

27) 前掲24) 参照。

---

<2008.8.29 受理 えがみ としのり 国際日本文化研究センター情報管理施設資料課資料利用係係長>

## EGAMI Toshinori

### A case of long-term internship in foreign library: Report on the internship project of Harvard-Yenching Library

**Abstract:** The author spent one year at the Harvard-Yenching Library on an internship, beginning in March 2007. He prepared a catalog of Japanese rare books for publication, attended meetings and library conferences, made site visits to other libraries, and reported his findings in real time through a blog. Some of the benefits of long-term internship in a foreign library include gaining experience with communicating and exchanging information (not just receiving but also giving), experiencing services from an insider's perspective, and gaining a better appreciation for the reasons for developing these services as well as their negative aspects. The author also considers issues such as the relationship between internships and career paths, public access to internship reports, and the value of sharing information about internship activities.

**Keywords:** overseas training / internships / Harvard-Yenching Library.